大阪府北部地震　救護班第 2 班活動報告

救命救急センター　看護係長　山下　美雪

2018 年 6 月 18 日に発生した大阪府北部地震において、私は、翌日の 6 月 19 日に救護班第 2 班の看護師長として派遣されました。

地震当日に派遣された救護班第 1 班の情報より、現地の医療ニーズは低いと判断されたため、第 2 班の派遣は現地の状況や日赤大阪府支部、大阪府災害対策本部、茨木市との調整のうえで決定することになり、第 2 班のメンバーは、当日通常通り各部署で業務を行いながら待機していました。その後、10 時 40 分頃に派遣が決定。メンバーは当院のロジスティクスセンターに集合し、出動準備やブリーフィング等を行った後、12 時 10 分頃に病院を出発しました。

出発式の様子

第 2 班は、被災地・避難所の状況把握・アセスメントが主な活動内容で、メンバー構成としては、医師 2 名、看護師長 1 名、看護師 2 名、助産師 1 名、薬剤師 1 名、主事 2 名の計 9 名と大阪府支部職員、神戸赤十字病院医師各 1 名とともに、茨木市保健医療センターへと向かいました。

茨木市保健医療センター到着後、保健師より被災地・避難所の状況・巡回報告を受けました。茨木市には 75 カ所の指定避難所・指定緊急避難所があります。そのうち、18 日の地震当日に特に避難者が多く訪れた 18 カ所の避難所を選定し、19 日午前中には、保健師 3 名を 1 グループとし、5 カ所ずつ分かれて避難所を巡回されたとのことでした。そして、その他の避難所については、茨城市と連携をとりながら、避難者数などの把握に努めていました。

茨木市保健医療センターでの様子

19 日 7 時 30 分の時点で、1 番多くて 50 名の避難者がおられた避難所がありました。その他は 10～30 名程でしたが、地震発災日の夜に、「自宅にいるのが怖い」「夜になると怖くて眠れない」といった不安を抱えて避難所に訪れてくる避難者が多かったとのことから、日中と夜間の避難者数は大きく変動する可能性があり、夜にはどれだけの数の避難者が訪れてくるかは予測できないとのことでした。

各避難所には、持病を抱える避難者や、今回の地震の影響でケガをしている避難者など、様々な避難者が集まっていました。しかし、今回の地震で持病の悪化や負傷したケガ等が悪化している避難者はおらず、また、持病のある避難者には誰かしらの支援やサポートがある状況でした。そして、地震発災後も周囲の医療機関は機能しており、何かあれば救急車要請

も可能でした。そのため、医療ニーズは少ないということを再度確認できました。

ライフラインでは、水・電気・通信に大きな影響はありませんでしたが、茨木市で最も影響が出たのが都市ガスでした。地震後、約 6 万 4254 戸でガス供給が停止したため、入浴ができないことや各種飲食店への影響が出ました。避難所では水道があることから、手洗いやトイレ等の使用は可能であり、消毒薬を設置するなどして感染対策が行われていました。しかし、これからの季節、万が一避難所生活が長引くようであれば、引き続き感染対策を考えていかなければならないと感じました。

避難者の家屋ですが、家屋の一部損壊、破損、亀裂等はあるものの、避難者の中で自宅に住めない方はほとんどいないことがわかりました。しかし、大きな地震を体験したことによる怖さや、また余震がくるのではないか、夜になると電気が消せない…など、地震への恐怖から自宅にいることができず、避難所を訪れている方がいらっしゃることがわかり、こころのケアが重点課題の一つであることが見えてきました。

また、保健師は地震発災直後より、少ない人数で茨木市内の被災者や避難所の状況把握等につとめ、不眠不休で活動してきました。しかし、人数に限界があり、茨木市に住む多数の高齢者・身体障害者等、援助が必要な方の安否確認ができていないこと、集めた情報をどう整理して、どう活用していけばいいのか困惑しているなどと言われ、疲労が蓄積されている様子でした。そのため、茨木市職員など関連機関への支援・サポート・連携も必要であることがわかりました。

今回、第 2 班は活動目的であった被災地・避難所の状況把握・アセスメントに時間をかけたため、長時間の滞在は難しかったですが、実際の現場を確認することも必要と考え、避難所 2 カ所のみ巡回を行いました。夕方の時間帯で大人は仕事へ出勤していたため、避難所にいるのは 10 人程度の主婦と子どもが主でしたが、敷かれたままの布団や置かれたままの荷物等があり、夜に避難所に帰ってくる避難者がいるのだろうと推測されました。避難者に声をかけたところ、体調を崩されている方はおらず、やはり家にいる恐怖感から避難所にとどまっているとの声が聞かれ、被災者が心身ともに休めるようにこころのケアの必要性を実感し、引き続き赤十字として被災地のためにできることを考え、支援していくことが大切であると感じた活動になりました。

私自身も茨木市民の一人であります。医療ニーズとしては少ないものの、ガス供給が未だ停止している地域や、家屋の損壊・亀裂、通れない道等々、まだまだ大きな爪痕は残されている状況です。今後も、赤十字職員として、一市民として、被災地のために自分ができることはないかを考え、活動していきたいと思います。